
土地分類基本調査

千 葉

5 万分の 1

国 土 調 査

千 葉 県

1 9 7 9

序 文

本調査は昭和44年度にスタートして以来、「八日市場」、「館山」、「鴨川」、「那古」、「上総大原」、「勝浦」、「茂原」、「大多喜」、「富津」、「東金」、「木戸」、「木更津」、「姉崎」、「野田」と今回の「千葉」で15図幅を数え、県土の4分の3をカバーするに至った。

近年の安定成長への移行に伴い若干スピードは鈍化したものの、首都圏のライトサイドに位置する本県への、住宅地を中心とした土地需要は依然根強いものがあり、殊に本図幅の主要な対象区域である千葉市は県都であるという固有の条件とも相まって大規模団地等による土地利用転換が活発に行われている状況にある。

一方こうした急激な開発の進行に対して、これを適正に管理し、人間と自然の調和等総合的な観点からの土地利用政策が検討され、そのために土地に関する各種基礎的な情報の整備充実が要請されているところである。この意味で自然科学、社会科学を駆使して体系的にとりまとめられた本調査の成果は、国土の実態を総合的即地的に把握し、さらに土地利用の将来を展望する有効な手がかりとして期待されているところである。

「雨垂、石を穿つ」如き累々とした時間の堆積を以て県土の実相に迫りつゝある本調査の成果が地味ながら普遍的な刻印を国土行政に記すことを信じ、土地利用計画、地域計画、防災計画等に広く対応し得るよう、より一層の充実を期してゆきたい。

また本調査の趣旨を理解され、御協力をいただいた千葉大の近藤、川崎、白井各先生、農業試験場、林業試験場等関係各位の御苦勞に深く感謝の意を表するものである。

昭和 55 年 3 月

千葉県企画部長

吉 田 巖

目 次

序 文

ま え が き

総 論

- I 位置および行政区画…………… 1
- II 人 口…………… 2
- III 地 域 の 特 性…………… 3
- IV 主 要 産 業 の 概 要…………… 9
- V 開 発 の 現 況……………12

各 論

- I 地 形 分 類 図……………15
- II 表 層 地 質 図……………21
- III 土 壌 図……………25
- IV 水系および谷密度図……………28
- V 傾 斜 区 分 図……………31
- VI 土 地 利 用 現 況 図……………32

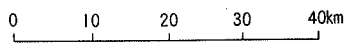
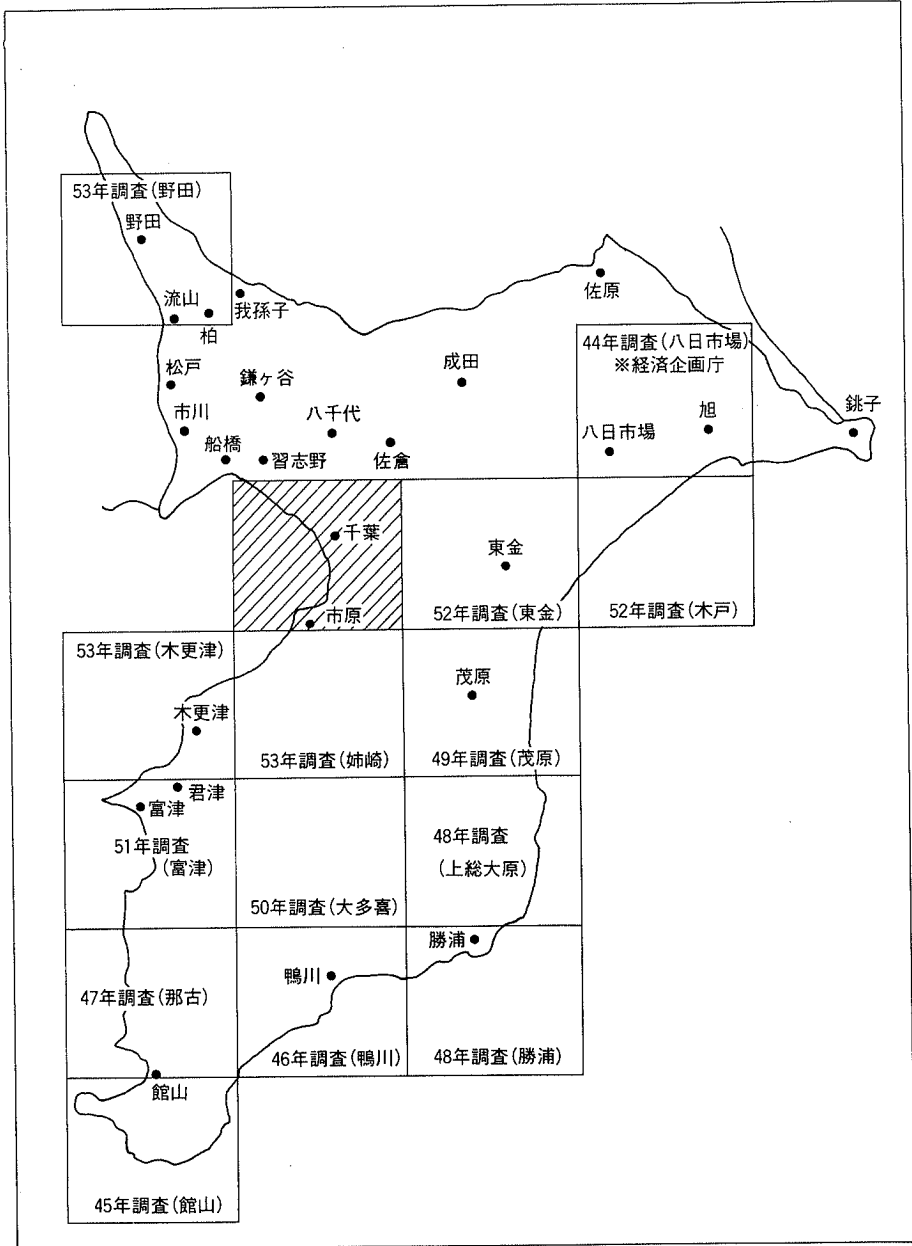
ま え が き

1. 本調査は、千葉県が事業主体であり、千葉大学の協力を得て行なったものである。
2. 本調査は、自然条件のうち、土地の基本的性格を形成している地形、表層地質、土壌の3要素を基礎とし、これに水系・谷密度、傾斜区分、土地利用現況を加味し、その結果を相互に有機的に組合せることによって科学的な土地利用の可能性を分類するものである。
3. 本調査成果は、国土調査法施行令第2条第1項第4号の2の規定による土地分類基本調査図及び土地分類基本調査簿である。

調査・成果の作成機関及び担当者

企画調整編集	千葉県企画部企画課	課長	小林成朗
	“	課長補佐	横田一成
	“	係長	藤野裕生
	“	副主査	浜上興一
	“	主任主事	鶴巻成男
調整連絡	千葉県農林部農産課	係長	北川智也
	“ 林務課	主査	林田善
地形調査	千葉大学理学部	文部教官	川崎逸郎
	“ 教育学部	“	白井哲之
表層地質調査	千葉大学教養部	文部教官	近藤精造
	“ 理学部	“	高井憲治
	市立銚子高等学校	教諭	加瀬靖之
	県立八千代 “	“	橋本昇
土壌調査	千葉県農業試験場	地力保全 研究室長	松本直治
	“	技師	安西徹郎
	“	“	金子文宜
	千葉県林業試験場	育林研究 室長	青沼和夫
	“	技師	岩井宏寿
開発関連調査	千葉大学理学部	文部教官	川崎逸郎
{水系・谷密度調査}	“		宮脇信広
{傾斜区分調査}			
{土地利用現況調査}	“ 園芸学部		飯田有貴夫

位 置 図



総論

I 位置および行政区画

1. 位置

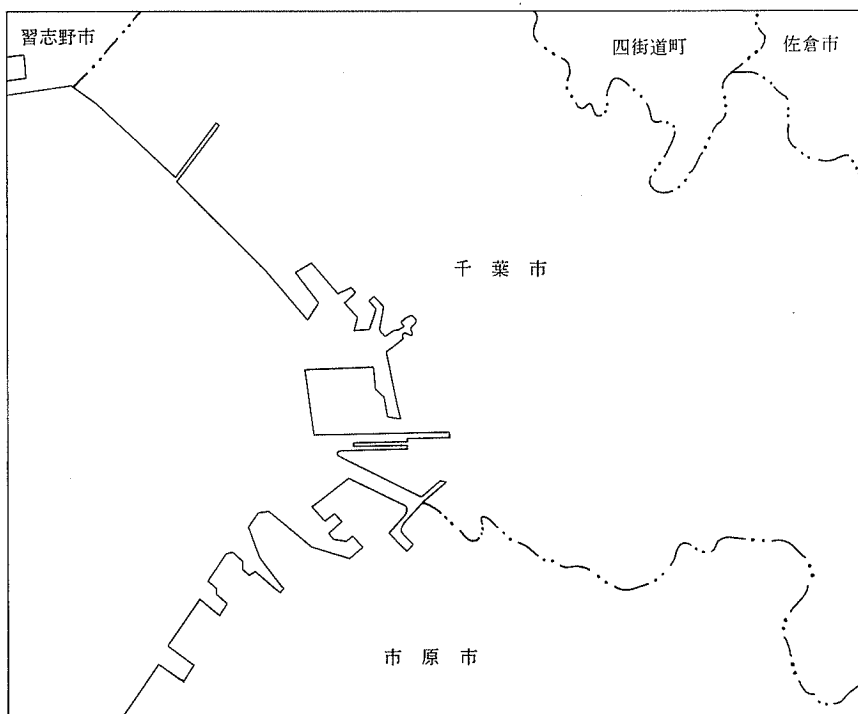
「千葉」図幅は、房総半島の中央部、東京湾岸に位置している。

経緯度的位置は、東経 $140^{\circ}00'$ ～ $140^{\circ}15'$ 、北緯 $35^{\circ}30'$ ～ $35^{\circ}40'$ の範囲である。

2. 行政区画

本図幅の行政区画は、千葉市の大部分、佐倉市 習志野市、市原市、四街道町の一部区域の4市1町からなる。

第1図 行政区画図



Ⅱ 人 口

本地域は、県都千葉市を含み、本県の産業・行政及び文化の中心として発展してきた地域であり、人口は増加を続けている。

特に、京葉臨海工業地帯の発展と並行し、昭和30年代後半から内陸部各所に、40年代に入っては臨海部造成地に大規模な住宅団地が計画・建設され、他地域からの流入人口を主として著しく増加した。

本地域は、その地理的条件により宅地需要の強い地域であり、また、人口の自然増も多く、今後とも人口の増加が予想される地域である。

第1表 世帯数、人口、人口の移動状況

区 分		年 次					
		昭和49年	昭和50年	昭和51年	昭和52年	昭和53年	
千 葉 市	世帯数	183,609	196,206	203,055	209,458	215,532	
	人口	609,625	659,356	683,526	702,820	720,999	
	移動 状況	総数	40,183		24,170	19,245	18,179
		自然増減	11,633		11,199	10,170	9,852
	社会増減	28,550		12,971	9,075	8,327	
四 街 道 町	世帯数	9,496	10,159	11,589	13,036	14,656	
	人口	34,846	37,401	42,350	47,411	53,158	
	移動 状況	総数	2,626		4,949	5,110	5,747
		自然増減	559		552	562	614
	社会増減	2,067		4,397	4,548	5,133	

千葉県企画部統計課「千葉県統計年鑑」

- (注) 1. 昭和50年数値は、国勢調査による。
 2. 昭和49年及び昭和51年～昭和53年数値は、昭和45年又は昭和50年の国勢調査の世帯数、人口を基礎とし、毎月市町村からの出生数、死亡数及び転入数、転出数並びに世帯数の増減報告資料により推定したものである。

Ⅲ 地 域 の 特 性

1. 自然的特性

千葉図幅はすでに調査を終了している姉崎・木更津図幅と東金・木戸図幅によって南と東側を囲まれているところ。これら図幅を囲む地域的特徴が僅かであるが千葉図幅の中に見出すことができる。姉崎図幅や東金図幅にある下総台地の平坦なひろがり、本図幅において最も代表的な形態となっておりあらわれている。そして、房総半島が東京湾に対して南西方向にほぼ直角に海岸線の向きを変えているのも本図幅の特徴である。

国内線の航路は図幅の西側付近を通り西に向う成田空港を飛び立ったジェットは、本図幅に進入するまでにスモッグの厚い層を抜けて5,000mの高度を保ち機首を館山一大島方向に向けなければならない。そして帰路の航路上の待機、施回させられる地域でもある。またセスナ機からみると、台地上の景観は林地が目立つが林相からみて殆ど人工針葉樹林、天然広葉樹林が目立つ。畑地にはビニール覆いが幾何学的模様を描いて年々増えているのが見える。春先の施風が起す関東ロームからの黄塵万丈がなければ、気候からみても住みよい地域であることが首都圏の中で認識が高まり、GNP 1位を誇った頃から造成が進み住宅団地が目立ち、春の土煙りも昭和54年現在では大部おさまっている。

図幅の大部分を占める下総台地の高さは、都川の北、四街道付近では標高30m、都川の谷の南、越智、誉田高田付近では70mの標高となっている。したがって、本図幅の中で下総台地は都川の谷を境として南側の台地は、中央から折れ曲った一枚板のように急に高度を上げていることになる。この台地を刻んで東京湾に流れ込む都川、村田川、養老川の河口付近は急激に進む埋立造成のため、三角州の姿を認めることは難しい。養老川の河口付近に僅かに三角州の姿を認めることができる。図幅の東京湾側には河口付近から沖にかけてひろがっている、たくさんの「海苔そだ」は本図幅の海が遠浅であることを物語っている。この遠浅の海岸に広大な埋立地が並び日本有数のコンビナート地帯となっている。遠目には海に薄い皮膚膜のような埋立地の面積は次第に増え、工業団地のほかに生活団地がのっている埋立地も次第に増えている。そして、美術館、ホテル、銀行、市役所、商工会

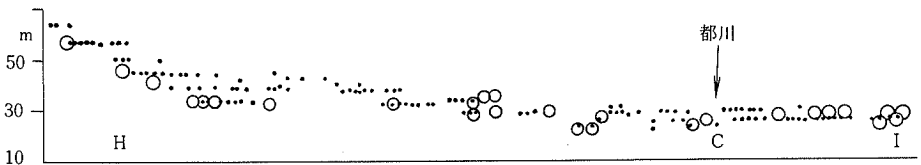
議所等が新しい空間を求めてここに集っている。そしてここには自然の海岸ではなく防潮堤を廻らした現代の新しい人工海岸が海の中に幾何学的模様を描き出し、海苔舟の姿は次第に海岸から遠くなっている。

(1) 地 勢

本図幅の地勢は、前記の下総台地と埋立地とそれに海岸低地、谷地からなり、台地を切る都川の谷、村田川の谷、鹿島川の谷……等が台地の単調さに変化を与えている。台地からみてゆくと、その基部は固結度の低い砂層、その上に粘土層（この層は図幅の海岸寄りの方が厚く1mくらいある）、最上位に関東ローム層と呼ばれる褐色の火山灰層が現在の台地の地表付近をつくっている。春の施風が起す黄塵万丈はこの火山灰が舞い上ったものである。この火山灰層は孔隙率が高く透水性も良い。そして細粒なので雨が降るとすぐぬかるみとなり、降らないとすぐ乾き土埃りとなる。膨脹・収縮が大きく100mm程度の集中豪雨でがけくずれを発生させる。また降雨が無くとも春先の霜によるがけくずれを起し、がけ下の民家に意外な被害を与えることが時々ある。

本図幅の下総台地の表面はほぼ平坦であるが、村田川、都川、養老川等の主谷のほかには印旛沼・手賀沼水系が入り込んで分水界の位置は複雑な経路である。この分水界を辿って大網街道、佐倉街道、成田街道…等の古い交通路が通っている。台地を刻む前記の各谷系は、房総半島という単位で眺めると、その配置と形状からみて、台地に入る大きな割れ目と考えてよかろう。これらの谷の谷頭や谷の周縁には先史時代の遺跡である貝塚が多く分布している。その貝塚の高さを都川を中心として北側と南側に追跡すると第2図のようになっており、

第2図 先導谷と遺跡の分布



貝塚がとりまいている台地上の浅い谷(先導谷)と遺跡(貝塚を含む)の分布図。図の右端のIは稲毛(園生貝塚のあるところ)、Cは千葉、左側のHは誉田高田の位置(川崎原図1958)

都川以南で急に貝塚は高度を上げている。出土する遺物からみると、都川以南の譽田高田貝塚でも、北にある園生貝塚、加曾利貝塚でも、時代的には大きな違いが無いところをみると、都川を挟む貝塚の高度分布は一種の構造的運動の結果と考えることができる。そしてこれらの谷に海水が侵入していたことは貝塚の分布で明らかにされているが、歴史時代に入ってから東京湾の海水は本図の谷の奥まで浸していたことがあったことを更級日記から知ることができる。

「……しもつきの国に、まのしてらという人住みけり。ひきぬのを千むら、万むらをらせ、漂させけるが家のあととて、深き河を舟にて渡る。昔の門の柱のまだ残りたるとて、大きな柱、河のなかに四つたてり……。」

今から900年程昔のことである。この頃の海面を北にひろげてゆくと、今の江東地区、浅草、葛飾は東京湾の底であったことになる。そして都川以南の東京湾側の海岸低地（五井一八幡の町のあるところ）が水から顔を出し陸地となったのはその後の（更級日記より後の）ことということになる。これが大地の動き方の有様であろう。五井一八幡の町がのっている海岸低地には古い潮流が運んで生長した砂丘（砂堆）が、台地の端から2～3kmほど離れた位置にあり、背後の台地の縁に並行して配置している。現在の国鉄内房線と古い木更津街道がこの少しでも高い砂丘（砂堆）の上を通り、五井・八幡は往時の宿場町の面影が僅かに残っている。

都川はじめ各谷系のところは地下水位が高く湧水点が多い。谷の一部にはピート層のところがあり道路や団地造成には難しいところとなっている。しかし、近年の住宅団地増加の傾向は、このようなところを充分調査せずに造成しているため、本図幅内の数ヶ所において住宅団地の地盤沈下が起っている。造成施工者側にとっては要注意地域であることを記しておく。

(2) 気 候

この地域は、東京湾に面し、第2表のとおり、温暖な気候である。

年間平均気温の平年値は14.9℃、年間降雨量の平年値は1,208mmである。

第2表 月別平均気温・降水量

種別 月別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	全年
平均気温(℃)	5.8	8.2	9.4	13.3	17.2	23.4	24.2	26.7	23.4	18.9	14.0	9.3	16.2
降水量(mm)	59	75	47	113	93	92	89	38	98	233	178	50	1,164

銚子气象台 千葉測候所 昭和54年資料

(3) 動植物

本図幅は姉崎・木更津、茂原、東金・木戸図幅に囲まれた地域で地形、地質等に起因する自然景観は近接する上記各図幅に類似しているところが多い。本地域の自然景観が最もよく見られるのは代表として野呂町・和泉町にある泉自然公園がある。ここは太平洋側と東京湾側の分水界にあたるところで、自然公園を抜けると、太平洋の風にあたることができる。国道126号は背の高いスギの林と雑木林の中を通り東金に向うところでもある。白壁の土蔵と茅ぶき屋根の民家など、人間社会の昔の自然もこのあたりに残っている。千葉から来ると、泉公園までは都川の幅広い谷がつづきその谷頭は公園付近の竹林と雑木林で終わっている。この都川の谷を航空写真で見ると谷のところどころに濃度の高いところが分布しているのを見ることができる。これは地勢の項で記した湧水箇所で大いものは径1kmほどの湿地をつくっているところもある。湧水の多いところは水田耕作ができずヨシ、マコモの群落となっている。秋から冬にかけて晴れた日には谷のところどころに背の高い枯れたヨシの色が鮮やかである。シジミ、タニシが生息しているところもあり、白いサギも数は少ないが飛来する。都川の谷の両側の下総台地の崖下には竹林、ハンノキが見られるが、谷の北側の急崖の下には竹林が点在しているのが遠目でもよくわかる。本地域の台地上の植生はスギ、ヒノキ、ミズキ、アカマツ等があり、大部分は植林である。自然林は雑木林に姿を求めなければならない。低木層のコナラ、クヌギ、シイ、タブ等が多いところも次第に減少している。昭和30年頃から千葉大学の神尾明正氏によって発掘が開始された園生貝塚は、アカマツ、スギ、クヌギ、シイ等が渾然一体となって生育しているところで昼なお暗く、夏は冷しく発掘に参加した学生達は作業と休憩が同じところでできたので評判がよかった。木陰で休憩ができるくらい当時の植生状態は見事であった。また、台地を切る谷の斜面は急崖部を除いて、コナラ、クヌギ、竹林、ハンノキ等が自然林をつくっていたが、崖下の造成のため、次第に姿を消している。現在は大部分がスギの植林である。

動物については姉崎・木更津図幅を参照されたい。

参考文献

1. 土地分類基本調査「茂原」(1976)
2. 土地分類基本調査「東金・木戸」(1977)
3. 土地分類基本調査「姉崎・木更津」(1978)
4. 土地分類基本調査「野田」(1979)
5. 川崎逸郎(1958)：下総台地の先導谷、立正地理学会1958年研究報告

2. 社会・経済的特性

本地域は、明治6年千葉町に県庁が置かれて後は県の経済・行政・文化及び交通の中心として発展してきた。

また、戦前・戦中は鉄道連隊を置く軍都であり、市街の約7割を戦災により失ったが、戦後急速に復興し、昭和25年の川崎製鉄の誘致を契機とする京葉臨海工業地帯の形成により、のり養殖・採貝を主とする漁業や都市近郊型の農業などの第一次産業依存から電力・製鉄・石油化学などの重化学工業へと産業構造が変化してきた。

一方、千葉港は特定重要港湾に指定され、貨物取扱量が神戸港に次ぎ全国第2位となり港湾都市としての性格も強めてきている。

千葉市を中心に形成された商圏は、その熟度が高く隣接する他地域に強い影響を与えており、また、臨海部に集積された卸売・流通機能は、本県卸売・流通機能の中核をなしている。

このような発展の中で、県都及び首都50km圏内という地理的条件を求め他地域から流入する人が多く、急激に人口が増加してきた。今後とも人口の増加が予想され、これらを計画的に受け入れるため、埋立地には海浜ニュータウン、内陸部には千葉市東南部ニュータウン等の新しい街づくりが進められている。

「県都」と「千葉港を核とする国際都市」の二つの顔を持ち、千葉市が政令指定都市を目差し、その顔づくりを進めている現在、これらをどのように調和を図っていくかは今後の重要課題である。

第3表 就業構造

区 分	市 町	千 葉 市		四 街 道 町	
	数	人 数	構 成 比 (%)	人 数	構 成 比 (%)
総	数	281,288	100.0	15,774	100.0
第 一 次 産 業	計	10,502	3.7	1,674	10.6
	農 業	10,281	3.6	1,662	10.5
	林 業・狩 猟 業	48	0.0	2	0.0
	漁 業・水産養殖業	173	0.1	10	0.1
第 二 次 産 業	計	90,266	32.1	4,622	29.3
	鉱 業	156	0.1	25	0.2
	建 設 業	26,770	9.5	1,627	10.3
	製 造 業	63,340	22.5	2,970	18.8
第 三 次 産 業	計	178,239	63.4	9,409	59.7
	卸売業・小売業	67,335	23.9	3,260	20.7
	金 融・保 険 業	11,434	4.1	648	4.1
	不 動 産 業	3,585	1.3	194	1.2
	運 輸・通 信 業	22,547	8.0	1,282	8.1
	電 気・ガ ス・水 道・ 熱供給業	2,772	1.0	151	1.0
	サ ー ビ ス 業	53,657	19.1	2,731	17.3
公 務	16,909	6.0	1,143	7.3	
分 類 不 能 の 産 業		2,281	0.8	69	0.4

昭和50年国勢調査資料

Ⅳ 主要産業の概要

1. 農 林 業

本地域の農業は、首都及び県都の大消費地を間近に控え都市近郊型農業により展開されてきている。

農業生産は、畜産・畑作の比重が高く、また、畑作では野菜の占める割合が多くなっている。

畑作の作付状況では、麦類・かんしょ等に代わり野菜類が多くなっており、主要作物はらっかせい・にんじん・だいこん等である。

施設園芸としては、きゅうり・いちご・トマト等の野菜類の外、鉢物・切花等の花き・植木類の生産が行われている。

畜産は、郊外で牛乳生産とブロイラー飼育を中心に行われており、本地域の農業粗生産額の約3割を占める基幹部門となっている。

水稻は、※1,762ha（昭和53年普通作物調査）で作付されており、県内作付面積の2.2%にあたる。

果樹では、くりの外、うめなどが栽培されている。

林業は、備蓄林的な経営が行われ、農業との複合経営の一つとして位置付けられている。備蓄林としての林は、複層林の形態をとるものも多く、山武林業の影響を強く受けている。

また、近年しいたけ等の特用林産物の栽培が活発である。

（注）※の数値は、千葉市、四街道町の合計値である。

2. 工 業

本地域は、浦安町から富津市に至る約80kmの海岸線を埋め立て形成された京葉臨海工業地帯の先駆けとなった地域である。

それまで本地域の工業は、澱粉を利用したアルコール製造・水あめ製造等の食料品工業が主力であったが、昭和28年の川崎製鉄の操業開始、翌年の千葉港開港を引金に、千葉市南部から市原市の臨海埋立地に、発電所・製鉄所・石油化学工場・重電機工場・食品コンビナート等が建設され、一躍全国有数の工業地帯に変貌し、本県工業化の原動力となった。

また、内陸工業団地としては県内でも早い昭和44年から千葉市に鉄鋼工業団地が操業を開始し、臨海工業地帯と連関して加工部門を受け持っている。

今後は、更に県内各工業のより密接な連関の下に付加価値の高い、高次な加工工業の育成が望まれている。

第4表 昭和53年産業中分類別事業所、製造品出荷額一覧表

産業中分類	事業所数	従業者数(人)			製造品出荷額 (万円)
		計	常用労働者	個人・家族 従業者	
千葉市計	1,316	38,014	37,214	800	95,862,988
食料品	205	6,229	6,105	124	20,941,280
出版・印刷	165	1,351	1,239	112	940,346
石油・石炭	8	1,178	1,178	—	10,616,678
ゴム	16	1,421	1,407	14	1,745,424
窯業・土石	51	1,514	1,500	14	2,834,497
鉄鋼	25	13,611	13,609	2	41,736,298
金属製品	230	3,967	3,834	133	5,689,091
一般機械	116	2,888	2,834	54	5,840,995
電気機械	52	1,249	1,229	20	1,293,340
その他の製造業	122	1,175	1,093	82	843,805
その他	326	3,431	3,186	245	3,381,234
四街道町計	48	1,483	1,452	31	1,769,102
食料品	6	184	183	1	430,537
金属製品	13	201	195	6	374,510
精密機械	5	788	784	4	785,701
その他の製造業	4	72	66	6	77,409
その他	20	238	224	14	100,945

(注) 1. 「その他」欄は、事業所数又は製造品出荷額の少ないもの。

2. 四街道町の「製造品出荷額」欄は、製造品出荷額等と読み替え、製造品出荷額のほか、加工賃収入額、修理料収入額を含む。

昭和53年12月31日現在

「昭和53年工業統計調査結果報告書」(千葉県企画部統計課)

3. 商 業

本地域は、従来より県都千葉市を中心とする商圏が形成されており、百貨店、専門店、金融機関等が高度に集積している。

また、本地域は、商圏としての熟度が高いため、東京通勤圏にありながら東京商圏への購買力の流出は少なく、隣接する印旛・山武・長生郡からの流入が多い。

本地域は本県の卸売機能の中核をなす地域であり、千葉市臨海部には卸売団地が形成されている外、自動車・薬品・食料品等の流通機能の集積が著しい。

4. 観光（史跡・名勝）

本地域の臨海部では、埋立てで失われた水際線を市民に開放すべく人工海浜が整備され、延1,200mの稲毛の浜、1,800mの幕張の浜は、春は汐干狩、夏はヨット・海水浴の場として親まれている。

千葉市の加曽利貝塚は、直径130mの環状貝塚と170mの馬蹄形貝塚からなり、日本最大、世界でも屈指の規模といわれ、国の史跡に指定されている。付近一帯は史跡公園として整備され、園内の博物館には発掘品が展示されている。

また、郊外にある泉自然公園は、約43haの起伏に富んだ地形の園内に、池・各種広場・サイクリングコース・3万㎡のなだらかな芝生地等があり、人々の憩いの場として親まれている。

市街には、坂東三十三ヶ所第29番の霊場である千葉寺、江戸時代に関東18檀林の一つとして格式を誇った大蔵寺があり、人々の信仰を集めている。

V 開 発 の 現 況

1. 道路・鉄道

この地域の道路は、東京湾に沿い国道14号が走り、千葉市を中心に国道16、51、126、297、357号及び主要地方道の千葉臼井印西、千葉大網、千葉茂原、千葉鴨川の各線が県内各方面に放射状に延びている。

昭和54年3月に国道126号のバイパスとして千葉東金道路が、昭和55年2月に千葉と茂原を連絡する千葉外房有料道路の一部が開通し、また、京葉道路4期、国道16号バイパス及び東関東自動車道市川潮来線が建設中であり、東関東自動車道千葉木更津線が計画されている。

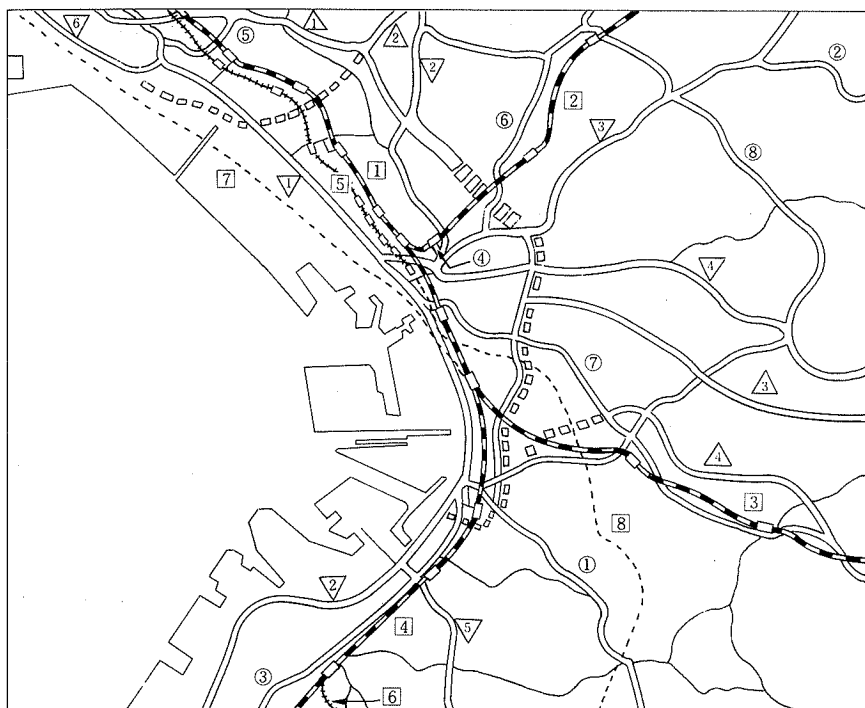
鉄道は、国鉄総武線と京成千葉線が東京と千葉を結び、また、千葉市を基点に銚子方面に国鉄総武本線、木更津方面に同内房線、茂原方面に同外房線がそれぞれ延びている。

国鉄総武線は、昭和47年から快速電車による東京駅直接乗り入れを行ないスピード・アップ、輸送力の増強を図ってきたが、更にラッシュ時の混雑解消を図るため津田沼駅・千葉駅間の複々線化を進めている。

蘇我と西船橋を結ぶ国鉄京葉線及び京成千葉と小湊鉄道の海士有木を結ぶ千葉急行線が建設中である。

また、千葉市内を廻る都市内交通機関として、モノレールの建設が進められている。

第3図 道路・鉄道図



道 路

鉄 道

国 道

- ▽ 14 号
- ▽ 16 号
- ▽ 51 号
- ▽ 126 号
- ▽ 297 号
- ▽ 357 号

県道 (主要地方道)

- ① 千葉茂原線
- ② 千葉八街横芝線
- ③ 千葉鴨川線
- ④ 東千葉停車場線
- ⑤ 千葉鎌ヶ谷松戸線
- ⑥ 千葉臼井印西線
- ⑦ 千葉大網線
- ⑧ 浜野四街道長沼線

有料道路及び高速道路

- ▲ 京葉道路
- ▲ 東関東自動車道
- ▲ 千葉東金道路
- ▲ 千葉外房有料道路

- ① 国鉄総武線
- ② " 総武本線
- ③ " 外房線
- ④ " 内房線
- ⑤ 京成千葉線
- ⑥ 小湊鉄道
- ⑦ 国鉄千葉線 (計画)
- ⑧ 千葉急行線 (計画)

2. 水 資 源

この地域の河川は、鹿島川、都川、浜野川、村田川等の6水系13河川が流れており、農業用水として利用されている。

しかし、本地域の河川は流量が少なく、都市を支える膨大な生活用水・工業用水の需要に対処することは困難であり、利根川・印旛沼等他地域の水資源に大きく依存している。

3. 港 湾

この地域の港湾には、江戸時代末期に寒川港として栄え、京葉臨海工業地帯の成熟と共に発展してきた千葉港がある。

本港は、昭和28年地方港湾に、昭和32年重要港湾に、昭和40年には重要港湾のうち外国貿易の増進上特に重要な港湾である特定重要港湾に指定されており、その港湾区域は、君津郡袖ヶ浦町から本地域を経て市川市に至り、海岸延長は、約130kmに及んでいる。

港湾貨物取扱量（昭和53年）は、神戸港に次いで全国第2位の13,400万tであり、原油・鉄鉱石の輸入、鉄鋼・自動車の輸出、鉄鋼・石油製品等の移出入が主となっている。

各論

I 地形分類図

「千葉」図幅は、県都千葉市の市域を中心に習志野、佐倉、市原及印旛の各郡市域を含んでいる。この地域は、県の行政、経済、文化の中核地域であり、土地利用にあらわれているように近年、急速にかつ大規模に地域変容をとげているところである。ここでは土地利用の高度化にともなって著しく地形改変が進んでいるが、改変された地形が本来はどういう性質の地形であるかが忘れられがちである。不等沈下や地盤沈下、排水不良、斜面崩壊などの地盤災害や水害は本来の地形の性質に由来したり、これを無視した結果であることに留意すべきであろう。

この地域の地形を大観すると、図幅の東部は、下総台地の西部にあたる台地が広く展開している。これに対して図幅の西部は東京湾北東部の水域が広く、これに沿って広大な埋立造成地が形成されている。それ故本図幅地域の地形的特性は台地と低地という、きわめて平坦性に富んだものであること、台地や低地とともに人工による地形改変が著しいことをあげることができよう。この二つの特性は、丘陵や山地を欠き、都市化の進む千葉県北部の地形的特性ともいえよう。

下総台地は、西は江戸川から東は銚子まで千葉県の北部一帯をしめ、高度は南部では150mほどにも達するが、この北部一帯では80m以下が広く、とくに本地域が含まれる西部地域は50m以下の所が広い。本地域では南西隅の80mが最高所であり、北および北西方向に高度をさげている。

下総台地の地形的性質は基本的に隆起海岸平野であり、南関東の古地理上明らかにされていることに従えば、下末吉期海進により台地の平坦面が形成され、その後の海面の低下の中で台地化したものである。この陸化の過程での地盤運動の様式や速度の差が地域によりことなり、また海面の低下も一様に進行したものではない。そのため下総台地として一括されるが詳細にみると数段の段丘にわかれている。本図幅地域でも大きく3段にわかれるが、さらに細分も可能である。

上位段丘としたものは、下末吉期の海進によるものであり、陸化に際し広大な干潟が生じていたころ、火山灰の降灰があり、これが常総粘土層としてのこっているものである。台地の大部分をしめ、四街道や千葉東部地域に広い。台地を開析する鹿島川（利根川水系）と都川、村田川、花見川（東京湾水系）の分水界は誉田から

野呂を経て四街道へと北西方向にのびるが、この分水界は習志野から松戸を経て野田に連なる下総台地西部の高所の一部でもあり、下総台地全体が北に傾斜する中でこの部分のみが異っており、地盤運動の隆起軸が推定されている。村田川流域は台地が著しく開析され斜面化しており、他の地域と異なっている。

中位段丘としたものは、東京湾に沿って幕張から千葉を経て市原にみられるものである。上位の面より5mほど低いことが多く、常総粘土層がない。下末吉期海進が海退していく際、現東京湾方向と現鹿島灘方向にわかれて後退していく中で、この地域では海面の停滞期があり、これが上位段丘を修飾し、中位の段丘をつくったと思われる。中位段丘は海岸段丘といってよい。

下位段丘としたものは、鹿島川、村田川、都川などの台地を侵食する河谷の中にみられる河岸段丘を主とする。これは都川流域や村田川流域ではさらに2つの区分され、千葉段丘1、千葉段丘2（杉原重夫1970）と呼ばれるが、本図の目的と性格からこれをまとめたものである。この段丘は河谷の左岸側、南斜面によくみられ、その反対側には少い片寄った分布傾向を示す。これは北流する河谷が多いこととともに地盤の隆起傾向が南に大きく北に少いことを示すものとして注目されてきた。なおこの段丘では高いものでは武蔵野期・立川期の火山灰層をのせており、低い方は立川火山灰層をのせている。

この地域の下総台地の特徴として、大規模宅地造成などによる地形改変が著しいことである。台地の住宅化も中小団地のうちは地形も平坦地を利用し改変の程度も少なかったが、近年の大規模な造成地は、台地面から台地斜面にかけて、谷を埋めあらたに斜面をつくって行なうものがふえており、斜面の維持管理が問題となる。

低地は鹿島川・都川・村田川などの河谷に沿う谷底平野と東京湾沿岸の平野がある。谷底平野では上記の各河川沿いにみられ、台地中に谷地田として入る。これらの谷底平野は縄文期海進（約6,000年前、現在より6mほど海面が高かった）には溺れ谷となったもので、東京湾側では出口に砂堆があり、今日でも排水が悪い。泥炭地も知られている。千葉から東京寄りのこうした谷地田は近年盛土により住宅化が進みつつあるが、地盤・排水ともに良好な条件をもつとはいえない。

海岸沿いの低地は人工地形が大きな比重を占めている。幕張から五井に至る約25kmは海岸線は全て埋立地の幾何学的なものとなっている。埋立以前にあっては平均

約1.5kmほどの干潟があり、稲毛方面では台地の崖下に海が迫り、八幡宿方面では砂堆の前面に海が広がっていた。今日この干潟は全て消え、旧海岸線から平均3km、所によっては5kmを越える沖合まで地盤高3m前後に埋立てられた。この造成は、1950年の川崎製鉄の千葉進出決定後、数度の計画変更を経ながら工事が進行したもので、今日、千葉港中央地区の整備計画を残してはいるものの、本地域の造成は終了している。

この埋立地の地形条件としては、千葉以北では、旧海食崖下には干潟の下に埋没波食台があり、容易に良好な基盤地質がえられるが、谷地田の延長部には地下谷があり、沖積層基底は深くなる。千葉以南でもこの傾向はみられる。養老川は典型的な尖状三角州であり、造成地の下には-40mに達する地下谷があることがわかっている。これらのことは平坦な造成地の地盤内容が一様ではないことを意味しており、不等沈下や地震動に対してもきめの細かい対応が必要なことを示している。

八幡宿、五井などの古い集落は砂堆の上にあるが、近年、土地整理事業により盛土造成がされた。

これらの各地の地形特性を考慮して、本地域をつぎの各地域に区分した。

I 台地地域

- I a 検見川台地
- I b 四街道台地
- I c 八街台地
- I d 土気一大木戸台地
- I e 平山台地
- I f 誉田台地
- I g 市原台地

II 低地地域

- II a 千葉北部埋立地
- II b 千葉南部埋立地
- II c 都川低地
- II d 蘇我一村田川低地
- II e 養老川低地

II f 鹿島川低地

これらの各地域について簡単にその特徴をのべる。

I 台地

検見川台地 (I a)

幕張から検見川を経て西千葉に至る中位の台地。台地の末端は15mほどでおわ
るが内陸では20mほどになる。内陸側の上位段丘との境は不明瞭である。幕張、
検見川、稲毛、黒砂などの台地面は小起伏があり砂丘がのっていることが特徴的
である。

四街道台地 (I b)

長沼、四街道、千城台、下田町など鹿島川以西、都川以北の地域の台地。台地
の高度は30~40mであるが、東京湾側と利根川側をわけており、高まりの長軸の
方向は幕張-千葉間の海岸線方向と一致しており、また「佐倉」図幅の西印旛沼
の低地方向とも一致する。それ故、この高まりは構造的な隆起軸であるとする考
えが出される。台地面は平坦で広い。

八街台地 (I c)

隣接「東金・木戸」図幅で八街台地としたものの続きであり、鹿島川以東の台
地であり、東方に高度をますが、本図幅では40m程度である。

土気-大木戸台地 (I d)

鹿島川上流域の台地で、隣接「東金・木戸」図幅の同名の台地のつづきである。
本地域ではもっとも高度が大きく大野では80mに達する。また北側への台地面の
高度低下がめだつ地域でもあり、本図幅主要三河川の分水域であり、段丘の形成
史からはなお詳細な検討が必要な地域であるが、上位段丘には分類できる台地
である。

平山台地 (I e)

都川と蘇我付近の低地に囲まれた台地を平山台地とした。この台地は都川流域
では上位段丘が広くみられるが、東京湾側では、開析谷がかなり深く数多く入り、
上位段丘は分断されている。また中位の段丘が、これまた分断されながらもみら
れる。都川流域では明瞭な河成段丘が二段よく発達している。海岸側には低い、
海成段丘が中位段丘の下についており、これも下位段丘とした。なお葛城付近に

は砂丘がみられる。

誉田台地 (I f)

これは村田川流域の北部の六通、大膳野、萩ノ台、瀬反などの分散的な台地と、東国吉、番場などの台地を含む。台地面積よりも台地斜面の面積の方が広く、本図幅地域中最も開析が進んでいる。上位段丘の高度は50～60mと高く、中位段丘はなく、下位段丘が3段ほどに区分出来る。番場、中野などの段丘は武蔵野期に相当する(杉原重夫他1978)という見解もある。

市原台地 (I g)

隣接「姉崎・木更津」図幅の市原台地の一部をなすもので、中位段丘が広く分布する。ここでは台地は北流する村田川支谷によって分断されるとともに、海岸側の低地にのぞむ部分は北西-南東方向の海食崖でおわっている。台地には辰巳台団地や若宮団地などの大規模造成による改変が広い。

II 低地

千葉北部埋立地 (II a)

幕張、検見川、稲毛、黒砂、登戸など都川以北の各地地先に造成された埋立地。旧海岸から約2～2.5km沖合まで、水深約5mまで造成された。幕張、検見川地区の造成は1976年と新しい。ここでは-5～-15mの埋没波食台は、埋立てと港湾建設に絶好の地盤を与えてきた、なお検見川の谷地田出口の砂州は内部に泥炭地をつくり、大賀ハスはここから出土している。

千葉南部埋立地 (II b)

都川から南西にのびる埋立地を一括する。ここは京葉臨海埋立造成地の出発点となったところであり、川鉄、東電地区、市原の五井地区といわれる。ここでは-10～-20mに沖積基底があるが、養老川の沖積層は比較的粗い砂層からなっている。

都川低地 (II c)

都川は上流に加曾利貝塚などがあり、縄文期の海の進入により入江化したことがいわれている谷である。(貝塚夾平他、1979)。

千葉市の中心部は都川の出口を塞ぐ形でつくられている二つの砂堆の上になっている。このため砂堆背後は排水不良地がひろがっていたが、盛土により都市化

が進んでいる。

蘇我一村田川低地 (Ⅱ d)

この地域のうち、寒川から蘇我を経て浜野へは、旧海岸に平行に砂州があり、この砂州と台地との間は砂州間低地がみられたが、砂州間低地は盛土され市街地化した。村田川下流は小規模な三角州であり、河道にそって自然堤防がみられる。

養老川低地 (Ⅱ e)

ここも基本的にはⅡ dと同じで、海側には砂州があり、その背後に低地がある。この低地は台地の海食崖の下に出きた干潟であったものが陸化したものである。砂州の部分は盛土されたが、低地部分は目下のところ農地であり改変は進んでいない。

養老川は尖状三角州であり、砂州をきって前進している。旧水路や自然堤防が錯綜している。

鹿島川低地 (Ⅱ f)

鹿島川は下総台地西部の最大の流域と長さをもつ侵食谷であり、印旛沼に注ぐ。本地域では、下泉付近から下流では低地の幅を増し、佐倉市の馬場では、谷底幅700mとかなり広くなる。支谷にくらべて本流は谷幅広く勾配はゆるく溺れ谷の形態がみられる。しかし下泉から上流では急に谷幅がせばまり勾配もましている。

(千葉大学文部教官 川崎逸郎)
 (" " 白井哲之)

Ⅱ 表層地質図

本地域は第四紀層からなり、台地を構成する下総層群と関東ローム層、低地を構成する沖積層からなり、その層序は第5表のとおりである。

第5表 層 序

時 代		層 群	地 層		
第 四 紀	沖 積 世	関東ローム層	沖 積 層		
			立 川 ロ ー ム 層		
			武 蔵 野 ロ ー ム 層		
			下末吉ローム層・常総層		
	洪 積 世	下 総 層 群	姉 崎 層		
			成 田 層	木 下 部 層	
				上 岩 橋 部 層	
				清 川 部 層	
			藪 層 ・ 瀬 又 層		
			地 蔵 堂 層		
			金 剛 地 層		

本地域内にみられる下総層群は、地藏堂層より上位の地層であって、地藏堂層および瀬又層は図幅の東南端付近に、ほぼ北東—南西の走向、ゆるい北西傾斜で分布している。成田層は全域の台地を構成し、その上に関東ローム層がのっている。姉崎層相当層は東京湾側と、鹿島川流域に分布している。

沖積層は海岸低地および、村田川、都川など河谷低地ならびに台地を刻むそれぞれの支谷沿いに分布している。

1. 未 固 結 堆 積 物

1-1 埋立地堆積物 (re)

この堆積物は東京湾に面した、市原市、千葉市の帯状に伸びる埋立地を構成している。この堆積物は隣接の海底を構成していた砂またはシルト質砂などからなり、比較的薄い沖積層の海底であった上に約10m近い厚さで埋積されている。標準貫入試験のN値で6～9の値を示すものが多い。

1-2 泥がち堆積物 (m)

泥がち堆積物は東京湾に面した海岸低地および村田川、都川の河谷低地および台地を切る支谷沿いに分布する。シルトおよび粘土を主とし、N値5以下の地域が多く、軟弱地盤となっている。

1-3 砂がち堆積物 (s)

海岸地域の砂丘、砂堆を構成し、また、千葉市の幕張町から松波町に続く海岸に面した台地上に分布する。低地においては、下位にある成田層に直接のり、台地上では関東ローム層の上ののっている。細粒～中粒の砂から構成され、N値5～10程度の値を示す。

1-4 泥₁(m₁)

姉崎層およびこれに相当する地層で、市原市から千葉市南部の東京湾側に面した台地上、鹿島川沿いの台地上などに、関東ローム層の下位、成田層の上位に存在し、3～10mの厚さをもっている。泥を主とし、泥炭質泥、軽石質泥、礫まじり砂、植物片などから構成され、陸水環境における堆積物と推定される。

1-5 砂₁(s₁)

成田層のうち、木下部層、上岩橋部層に相当する地層で、細粒、中粒、粗粒砂からなり粘土、礫などを挟むことがある。地層の厚さは10～20m程度であり、この砂層中の貝化石が佐倉市岩富、千葉市谷当などに産出している。

1-6 砂₂(s₂)

成田層の清川部層に相当する。砂およびシルトからなり、本図幅では南部の市原市潤井戸、瀬又付近に分布する。

1-7 砂₃(s₃)

菰層および瀬又層と呼ばれる地層で、本地域では瀬又層の模式地の千葉市越智下新田を中心に北東～南西に伸びて分布する。中粒～粗粒の砂を主とし、基底付近で礫を混入することがある。越智下新田の堰付近、高倉など貝層を挟むことが多く、*Glycymeris yessoensis*, *Glycymeris pilsbryi*, *Patinopecten tokyoensis*, *Olivella japonica* を始め貝化石の産出が知られている。

1-8 砂₄(s₄)

地藏堂層に相当する細粒～中粒の灰色砂を主とした地層である。本地域では東

南端に関東ローム層、成田層におおわれて分布している。

2. 火山性岩石

2-1 ローム₁(L₁)

関東ローム層のうち、立川ローム層のみから構成されている部分で、村田川沿いの向井、永吉、番場、都川沿いの青柳、坂月、鹿島川沿いの内田、坂戸など低位段丘面の地域の表層を構成している。

2-2 ローム₂(L₂)

関東ローム層のうち、立川ローム層と武蔵野ローム層から構成される地域である。武蔵野ローム層の下底近くにある東京軽石層が鍵層となる。東京湾側に面した検見川、稲毛、黒砂、都川沿いの都町、大宮町、村田川沿いの尾梨、鹿島川沿いの更科町、岩富付近など中位の段丘面の地域を構成している。

この関東ローム層と下位の姉崎層または成田層との間に粘土層を主とした常総層が存在する。

2-3 ローム₃(L₃)

関東ローム層として、立川ローム層、武蔵野ローム層、下末吉ローム層から構成されている地域で、高位の段丘面を形成している。東京湾に面した地域では標高約25m、東南では60mを越えた台地の表層に数mの厚さでのっている。

参 考 文 献

- 青木直昭・馬場勝良(1972)：関東平野東部、下総層群の層序と貝化石群のまとめ、地質雑、79、453~464
- 青木直昭・馬場勝良(1978)：成田層の古地理、筑波の環境研究 3号、187~197
- KIKUCHI, T. (1976)：Stratigraphy and geological structure of the marine Pleistocene of the Boso peninsula Japan, and relative changes in sea level from the middle to late pleistocene. *Geographical Rep. Tokyo Metropolitan Univ.*, 11, 133~146
- 小島伸夫(1962)：印旛沼南方から大網白里町に至る地域の成田層群について——成田層群の研究、第4報——地質雑、68、676~686

大原 隆(1968)：模式地の瀬又層、千葉大文理紀要、5、303～318

陶野郁雄(1977)：京葉地域における埋立て砂の密度と三軸圧縮性状、応用地質、
18、161～172

(千葉大学文部教官 近藤精造)

Ⅲ 土 壤 図

1. 台地の土壌

本図幅の大部分を占める台地は下総台地とよばれ、関東ローム層に覆われた火山灰台地である。この台地は地形分類上からさらに7つの台地に細分される（地形分類図参照）。台地の標高は概ね40m前後で起伏も緩やかであるが、菅田および土気一大木戸台地南側は70mに達し、比較的起伏も激しい。この広大な台地面は主として畑地や林地として利用されているが、一部の地域では市街化が急速に進んでいる。

土壌は火山灰を母材とした黒ボク土がほとんどで、特に表層の腐植含量が5～10%の黒ボク土壌である八街統、八街F統が最も広く分布している。厚層黒ボク土壌の文違統は主に台地の凹地に分布し、文違F統は主に低地への急斜面下部にみられる崩積地に点在しており、林地ではスギの造林適地になっている。また土気一大木戸台地の大野周辺には表層多腐植質の黒ボク土壌である住野統が分布する。また、都川低地などへ向かう緩斜面や台地面の周辺部には腐植含量が少ない、あるいは腐植層が25cm以下と薄い淡色黒ボク土壌の上砂F統が分布する。火山灰に異母材が混入して再堆積したと考えられる土壌には諸持統、船木統があり、さらに混合度の大きい香西A、B、C統、長塚統、椎崎統がある。これらの土壌のうち、千葉市畑町付近にみられる厚層黒ボク土壌の諸持統の腐植層は50cm程度であまり厚くない。黒ボク土壌の船木統は台地縁辺部に広く分布し、畑地としては八街統に次いで面積が大きい。淡色黒ボク土壌の香西A統、香西B統は都川、村田川、鹿島川の各低地に隣接した畑地に多く分布している。香西C統は鹿島川低地に面した低地畑に分布がみられる。また長塚統は火山灰に砂を混じえた土壌で検見川台地に広く分布し、千葉市小倉台西側の谷津田に面した急斜面にもごく小面積ながら分布が認められる。椎崎統は蘇我一村田川低地などの各低地へ向かう急斜面の林地に帯状に分布している。火山灰層が50cm以下と薄い岩切統は菅田台地南側に点在している。椎崎統、岩切統が分布する林地はマツ林や広葉樹林になっており、林業生産の低い地帯である。また火山灰と第三紀系の母材が混合したとみられる褐色森林土壌の上岩入2統は菅田台地南側の高倉近辺に分布している。

2. 低地の土壤

本図幅の低地の土壤は都川、村田川、養老川、鹿島川の沖積低地およびこれらの河川によって開析されて各台地に侵入する谷津群に分布しており、主に水田として利用されているが、養老川河口部一帯の沖積低地には畑地の利用もみられる。

水田土壤の多くは湿田の性格が強いグライ土が最も広範に分布しており、特に都川、村田川、鹿島川低地には壤粘質な土性の馬立統、下総統、黒部統が分布する。下総統は前述の河川の支流によって開析された小さな谷津群に主として分布する。グライ土のうち砂質の一松統、川上統は蘇我一村田川および養老川の沖積低地上に広く分布しているが、市原市平田付近では強粘質の干潟統がみられる。一方、灰色低地土の下布施統は市原市大厩付近にみられる。同じく灰色低地土の村上統、平三統は誉田台地と土気一大木戸台地を分かち比較的標高の高い谷津田に分布している。村上統は養老川低地の西野谷付近にもみられるが、市街化の波が激しく、宅地造成によって面積が減少している。泥炭土は花見川沿いの武石付近、佐倉市尾牛付近、蘇我一村田川低地の生実町、百亀喜、古市場付近にまとまって分布する。これらの土壤の黒泥あるいは泥炭の出現する深さはいずれも50cm以下である。

養老川低地上の沖積面に小面積分布している畑土壤のうち、椎の木統は壤粘質な土性の河成沖積土で、生産力は中庸であるが、榊統は砂丘未熟土壤であって、その生産力はきわめて低い。

(千葉県林業試験場 岩井宏寿)
" 農業試験場 安西徹郎)

第6表 土 壤 統 一 覧

土 壤 群	土 壤 統 群	(注2) 土 壤 統 名	色 グライ	腐 植 層 序	礫 層	酸 化 沈 積 物	土 性(注1)	母 材	堆 積 様 式	備 考	
未 熟 土	砂 丘 未 熟 土 壤	辨 統	YR/YR	表層腐植層なし	なし	なし	砂 - 砂		風 積		
黒ボク土	厚層黒ボク土壤	文達F統	YR/YR	全層腐植層	なし	なし	壤 - 壤・粘	火山灰	風 積	風積・再堆積	
		文達統	YR/YR	全層腐植層	なし	なし	壤 - 壤	火山灰	風 積		
		諸持統	YR/YR	全層腐植層	なし	なし	壤・粘 - 壤・粘	火山灰+洪積等	水 積		
	黒ボク土壤	住野統	YR/YR	表層多腐植層	なし	なし	壤 - 壤	火山灰	風 積	風積・再堆積	
		八街F統	YR/YR	表層腐植層	なし	なし	壤 - 壤・粘	火山灰	風 積		
		八街統	YR/YR	表層腐植層	なし	なし	壤 - 壤・粘	火山灰	風 積		
		船木統	YR/YR	表層腐植層	なし	なし	壤・粘 - 壤・粘	火山灰+洪積等	水 積		
	淡色黒ボク土壤	上砂F統 (注3)	香西A統	YR/YR	表層腐植層なし	なし	なし	壤 - 壤	火山灰	風 積	風積・再堆積, 強いまつち
			香西B統	YR/YR	表層腐植層なし	なし	なし	壤・粘 - 壤・粘	火山灰+洪積等	水 積	
		香西C統	YR/YR	表層腐植層なし	なし	なし	壤・粘 - 壤・粘	火山灰+洪積等	水 積		
雄崎統		YR/YR	表層腐植層なし	なし	なし	壤 - 壤・粘	火山灰+洪積	溜行・崩積			
長塚統		YR/YR	表層腐植層なし	なし	なし	砂・壤 - 砂・壤	火山灰+洪積等	水 積			
岩切統		YR/YR	表層腐植層なし	なし	なし	壤 - 砂	火山灰/第三紀	残 積			
褐色森林土	褐色森林土壤	上岩入2統	YR/YR	表層腐植層	なし	なし	壤・粘 - 壤・粘	火山灰+第三紀	溜行・崩積		
褐色低地土	褐色低地土壤	椎の木統	YR/YR	表層腐植層なし	なし	なし	壤・粘 - 壤・粘(強)		水積(河成)		
灰色低地土	細粒灰色低地土壤	下布施統	灰褐色	-	なし	あり	- 強粘質		水 積		
		村 上 統	灰褐色	-	なし	あり	- 壤・粘		水 積		
	平 三 統	灰色	-	なし	あり	- 壤・粘		水 積			
グライ土	細粒グライ土壤	干潟統	強グライ	-	なし	なし	- 強粘質		水 積		
		馬立統	グライ	-	なし	あり	- 壤・粘		水 積		
			下総統	強グライ	-	なし	なし	- 壤・粘		水 積	
	黒部統	強グライ	-	なし	あり	- 壤・粘		水 積			
粗粒グライ土壤	一松統	強グライ	-	なし	なし	- 砂		水 積			
	川上統	強グライ	-	なし	あり	- 砂		水 積			
泥炭土	低位泥炭土壤	吉田統	強グライ	-	なし	なし	- 壤・粘		水積・集積	50~80cmに泥炭層出現	
		布佐統	強グライ	-	なし	あり	- 壤・粘		水積・集積	50~80cmに泥炭層出現	
	黒泥土壤	和泉統	強グライ	-	なし	なし	- 壤・粘		水積・集積	50~80cmに黒泥層出現	
		安食統	強グライ	-	なし	あり	- 壤・粘		水積・集積	50~80cmに黒泥層出現	

(注1) 土 性：“-”は表層、次層を示す。“.”は表層、次層に関わらず認められる土性を示す。

(注2) ~ F 統：東金・木戸図幅に準ずる。

(注3) 香西A、B、C統：東金・木戸図幅に準ずる。

未 区 分 地 について：本図幅における未区分地-1は都市・集落、採石場・塚土場、河川・湖沼とし、未区分地-2は施設緑地、ゴルフ場、造成地、未使用埋立地とする。

Ⅳ 水系および谷密度図

本図幅内には東京湾に注ぐ主な水系としては、花見川、都川、村田川、養老川があり、印旛沼を経て利根川に至る水系としては鹿島川がある。東京湾側諸水系と利根川水系の境はかなり明瞭で、長沼から加曾利新田を経て小倉台、千城台を經、さらに高根町から、野呂町に至り、ここから南下して越智新田に至っている。

花見川は本来は検見川の谷を流れる自然流路であったが、現在は印旛沼の放水路となっており、上流部は新川の谷を経て印旛沼に至る。下流部は埋立地を貫流する。

都川は本流は中流部以下で西流するが上流では北流し、支谷も北流するものが多い。都川本流は佐和町から発して寒川町の河口まで約17.5kmと大きな河川ではないが、支川都川は約10.5km、支川葭川は11.4kmと北西—南東に長い流域をもっている。都川や支川都川の北流する侵食谷は長く、南流する谷は著しく短い。これは地表の一般傾斜に対応しており心従谷であるが、都川本流の西流する河谷の方向は傾斜の一般傾向と合致しない。地形形成の複雑さを思わせる水系である。

村田川は長生郡長柄町の山之郷に発し、北流して本図幅地域に入る。本図幅地域では西流して、主として南からの谷をうけいれて流れる。誉田台地には樹枝状谷が多く入り、最も谷密度の大きい流域となっている。

養老川は本地域で三角州をつくって東京湾にそそぐ、ここでは、水系としては旧河道の低所にそって水路が走るのがめだつ。

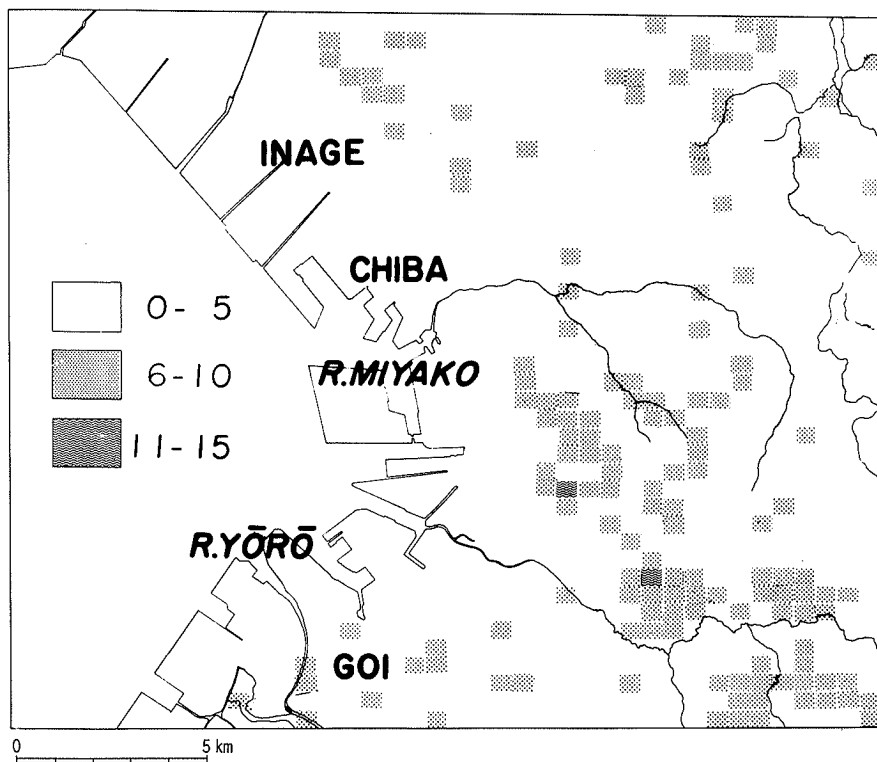
鹿島川は、千葉市土気町に発して本地域に入り、おおそ北流して、「佐倉」図幅の印旛沼に注ぐ、この水系は、下総台地を刻む最も広い流域をもつもの（流域面積251.9km²）であり、本流流路延長は29.0kmである。本図幅では、その上・中流部約17kmがある。この河川の分水界は著しく南に達しており、野呂町付近以南は都川の流域を争奪したようにみえる。四街道から野呂町を結ぶ線より北東部はほぼ鹿島川の支流の水系からなるが、いずれも北東流し、樹枝状に谷を発達させているが谷密度は大きくはない。やや大きな谷は平行、等間かくに分布している。

つぎに谷密度の分布を図幅全体としてみると、村田川流域とこれに接する浜野川流域が多い。いずれも東京湾斜面で、台地面の分化も多く、台地面の高度低下も大きい地域であることが注目される。これ以外の地域はおおむね谷密度低く、かつや

や多い所は散在的である。台地と低地のみ地形環境であるから当然のことである。

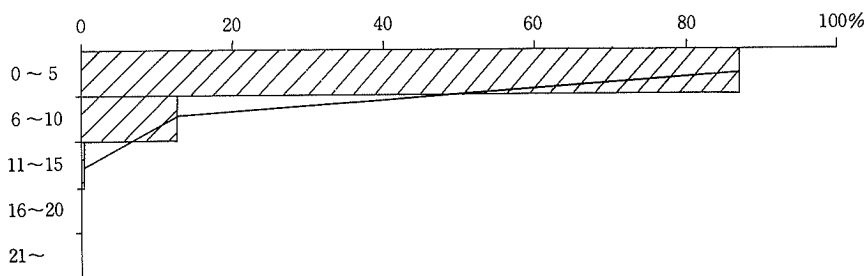
これを確認するために、谷密度の数値分布をみると、0～5が全面積の85%を越えており、きわめて谷が少ない地域であるといえる。

第4図 谷密度分布図



図幅を縦横に40等分した方眼の中で、作業規程にしたがって谷密度をしらべ階級区分を行ない、これを分布図に示した。図に示したパターンは数字は、それぞれの方眼の中にある谷密度を数値としてあらわしたものである。

第5図 谷密度の数値分布図



(千葉大学文部教官 川崎逸郎)
" " 白井哲之

V 傾斜区分図

本図幅の地形は、基本的には平坦性を特徴とする台地と低地からなっている。したがって、全体としての傾斜地の面積は狭く、また傾斜の値は低い。図幅を40等分した方眼の中の代表的な傾斜地点の値をよみとり、これを階級区分とし、方眼の数を数えて全体に対する割合をみたものが、傾斜値の数値分布図である。0～4°と平坦なものが40%を越え、急傾斜地に入る16°以上は16%にすぎない。

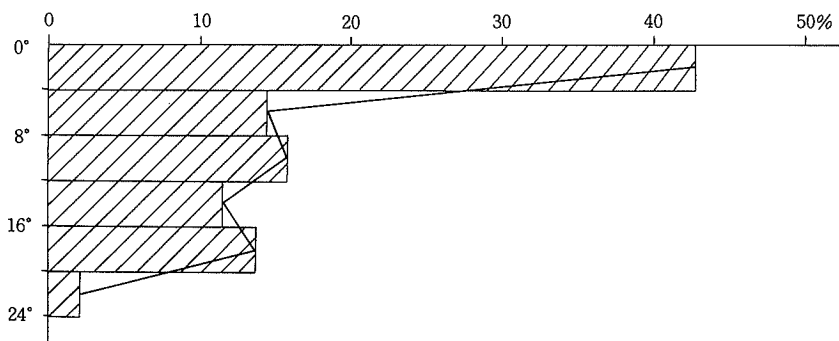
傾斜地の分布をみると、これは台地斜面である。とくに傾斜の著しく大きな地域は、村田川流域の誉田台地であり、瀬又、東国吉付近などにまとまって傾斜地がみられる。

鹿島川沿岸では主として河谷の北側に急斜面があり、南斜面では傾斜がゆるい。同様の傾向は都川本流沿いでもいえ、北側斜面は急崖が連続する。

検見川台地が低地にのぞむ斜面、平山台地や市原台地が海側の低地にのぞむ斜面などは比較的急であり、かつ連続して斜面がつづく。これらは海食崖であり、その地形的特徴が示されている。

このように本地域の傾斜分布は村田川流域のみが傾斜地が広いことを示しており、あとは線状ないし帯状の斜面連続分布であるので、他図幅で作成した傾斜分布図は作成しなかった。

第6図 傾斜値の数値分布図



(千葉大学文部教官 川崎逸郎)
 (" " 白井哲之)

Ⅵ 土地利用現況図

本地域の土地利用は、第7表のとおり概ね農地38%、宅地28%、森林27%、残りがその他となっている。

本地域は、京葉臨海工業地帯の発展と並行し宅地化が進み土地利用の状況が変化してきており、県全体と比較してみても、宅地の割合（県平均約13%）が高く、農地・林地の割合（県平均約49・31%）が低くなっている。

第7表 民有地土地利用現況

（単位：ha）

区分	市町	千葉市	四街道町	計
総面積		26,251.0	3,604.0	29,855.0
民有地総面積		18,367.2	2,775.6	21,142.8
構成比（%）		70.0	77.0	70.8
田	面積	2,077.2	368.7	2,445.9
	構成比（%）	11.3	13.3	11.5
畑	面積	4,767.9	798.9	5,566.8
	構成比（%）	26.0	28.8	26.3
宅地	面積	5,446.7	488.5	5,935.2
	構成比（%）	29.7	17.6	28.1
山林	面積	4,980.3	807.3	5,787.6
	構成比（%）	27.1	29.1	27.4
原野	面積	450.6	221.3	671.9
	構成比（%）	2.4	7.9	3.2
雑種地 他	面積	644.5	90.9	735.4
	構成比（%）	3.5	3.3	3.5

千葉県企画部統計課「千葉県統計年鑑」

- (注) 1. 総面積は、昭和52年10月1日現在の面積である。
2. 民有地総面積は、昭和53年1月1日現在の面積である。

1. 農地

本図幅内の農地は、村田川、都川など東京湾へ流入する河川流域及び印旛沼に注ぐ鹿島川流域並びに下総台地上に分布し、河川沿いの低地は水田、台地上は畑として利用されている。

本図幅内主要市町の農地は、耕地率（ $\frac{\text{耕地面積}}{\text{全面積}}$ ）で23%と県平均31%より低く、また、水田率（ $\frac{\text{水田面積}}{\text{耕地面積}}$ ）も29%と県平均59%よりかなり低くなっている。

本地域は都市化が激しく、休耕・宅地造成等により耕地が減少しており、優良農地の保全を図ることが必要である。

第8表 農振法による農用地区域面積(市町別)

(単位：ha)

区分 市町	農業振興地域内面積					農用地区域面積					農用地 指定率 (%)
	総数	田	畑	樹園地	その他 (採草放牧地)	総数	田	畑	樹園地	その他 (採草放牧地)	
千葉市	4,171	1,412	2,535	208	16	2,269	854	1,395	20	0	54.4
四街道町	1,016	357	624	33	2	518	245	240	33	0	51.0
計	5,187	1,769	3,159	241	18	2,787	1,099	1,635	53	0	53.7

千葉県農林部農政課「市町村農業振興地域整備計画書」昭和54年3月31日現在

2. 林 地

本図幅内の林地は、下総台地上に千葉市東部を中心に広がっているが、主要市町の林野率(林野面積/全面積)は21%であり、県平均33%に比べると低くなっている。

本地域は、マツ・スギなどの人工林が多く、東部地区では山武林業の影響を受けた集約的な林業経営がなされてきた。しかし、近年、社会・経済諸情勢の変化、土地需要の増大に伴って林業経営の停滞、林地の他用途への転用の傾向が強まっている。

第9表 市町別森林面積一覧表

(単位：ha)

区分 市町	総計	国有林	民有林			
			計	県有林	市町村有林	私有林
千葉市	5,352	4	5,348	9	59	5,280
四街道町	898	—	898	0	3	895
計	6,250	4	6,246	9	62	6,175

(注) 民有林には、地域森林計画対象外森林を含む。

第10表 森林資源現況一覧表

- 1 県有林

(単位: ha)

市町	区分	総計	天然林	人工林	竹林	その他
千葉市		9	0	6	—	3
四街道町		0	0	—	—	0
計		9	0	6	—	3

- 2 市町村有林

市町	区分	総計	天然林	人工林	竹林	その他
千葉市		59	13	39	0	7
四街道町		3	0	3	—	0
計		62	13	42	0	7

- 3 私有林

市町	区分	総計	天然林	人工林	竹林	その他
千葉市		5,280	863	3,808	132	477
四街道町		895	69	645	44	137
計		6,175	932	4,453	176	614

千葉県農林部林務課調べ 昭和54年4月1日現在

3. 都 市

市街地は、東京湾岸から低地部及び下総台地の西端部にかけてほぼ一定の厚みを持って広がると共に、鉄道に沿って東へ延び、また、内陸部には住宅・工業団地が散在している。

千葉港を中心とした臨海部及び千葉市の都心部は、工業・商業・業務地として利用されている外、千葉市北東部には内陸工業団地が形成されている。

本地域は、県都であり、また東京通勤圏に位置するため早くから市街化が進められてきたが、昭和30年代後半から、臨海部埋立地及び内陸部において大規模な住宅・工業団地が造成され、急速に市街地が拡大してきた。

都市計画区域は、千葉市が26,356ha、四街道町が3,606haとなっており、その用途地域の指定状況は第11表のとおりである。

第11表 市町別都市計画区域一覧表

(単位：ha)

区 分		市 町	
		千 葉 市	四 街 道 町
市 街 化 区 域	第1種住居専用地域	3,477	620
	第2種住居専用地域	2,290	171
	住 居 地 域	2,835	204
	近隣商業地域	367	22
	商 業 地 域	322	7
	準工業地域	462	—
	工 業 地 域	363	—
	工業専用地域	1,253	—
	小 計	11,369	1,024
市街化調整区域		14,987	2,582
計		26,356	3,606

千葉県都市部計画課調べ 昭和54年12月31日現在

(千葉県企画部企画課 鶴巻成男)

1980年3月 印刷発行

土地分類基本調査

千葉

編集発行 千葉県企画部企画課
千葉市市場町1番1号
印刷 内外地図株式会社
東京都千代田区神田小川町3-22